

映画分析から読み取る都市空間の構成要素と行為に関する研究
―「ローマの休日」を事例として―

宇野研究室

4105016 大橋 加奈子

1. 研究の背景と目的

都市を舞台とする映画は今日までに数多く作られてきた。昨今では、CG等バーチャル・リアリティの技術の発展により、架空の都市空間を作り出すまで表現の幅は広がっている。これら都市を舞台とする映画は、都市に対する認識の形成に大きな影響を与える視覚情報の一つと考えられる。そこで本研究では、都市の実空間が舞台の映画を対象として、映像を構図、構成要素^{〔1〕}、行為^{〔2〕}に分類して抽出・分析、実空間と比較し、都市空間における構成要素と行為の関係性を読み取ることを目的とする。

2. 研究対象

本研究ではCGを使わない実空間を舞台とした映画であること、ローマというモデル的な都市を舞台として、ローマの建築的な都市空間は20世紀に殆ど変化していないことから現在との比較が出来るとし、映画「ローマの休日」^{〔3〕}を対象作品とした。「ローマの休日」において広場の都市空間が見られる映像5シーンから建築的空間^{〔4〕}が2カット以上含まれるフォロ・ロマーノ、トレヴィの泉、スペイン広場の3シーンを対象の映像とし^{〔5〕}、各シーンの中で建築的空間がみられる計11カットを対象とした^{〔6〕}(図1、表1)。

3. 研究方法

- 1) 構図の分析
- 2) 構成要素の抽出
- 3) 行為の抽出
- (映像分析、文献調査、ヒアリング調査^{〔7〕})
- 4) 現地との比較分析と考察(現地調査)

4. 映像分析

4-1. 構図の分析 対象としたカットの撮影アングルを地図上に示し、各カットがどのようなアングルで撮影されているかを明らかにした(図2)。フォロ・ロマーノでは撮影位置が近いことから似たアングルが多く、紀元前の巨大な遺跡を背後に入れたり凱旋門を手前に持ってくる等、奥行き感のある構図になっていた。トレヴィの泉では主に泉へ向けてのアングルが多く見られ、泉の横の通りを撮影するものもあり、エッジの利いた建物と奥からのぞく泉のモニュメントの構図や、泉を挟んで反対側の通りを映す構図等、建物の特徴や泉の高低差を生かした構図に



▲図1 ローマ市の地図

註) Google earthより作成

なっていた。スペイン広場ではコンドッティ通り^{〔8〕}からのアプローチから階段まで3つアングルがあり、少しずつ階段をみせ、最後のカットでは階段の高さを生かした構図であった。トレヴィの泉とスペイン広場では、構図内に都市空間を構成する要素が多く認識できた。

4-2. 構成要素の抽出 3つのシーンの対象カットすべてにおいて映像に映し出される空間の構成要素を、フォロ・ロマーノでは10個、トレヴィの泉では20個、スペイン広場では28個抽出した。さらにそこから行為と関係のある構成要素を、フォロ・ロマーノで3個、トレヴィの泉で9個、スペイン広場で11個に絞り地図上に示した(図2)。

4-3. 行為の抽出 3つのシーンの対象カットすべてにおいて認識できる範囲でひとりひとりの行為を、フォロ・ロマーノでは7個、トレヴィの泉では101個、スペイン広場では52個抽出した。さらにそこから構成要素と関係のある行為に絞ったところ、フォロ・ロマーノで7個、トレヴィの泉で44個、スペイン広場で35個になり、それを表にまとめた(表2)。また行為を抽出すると同時に、各シーンにおける人の量と流れを読み取ったところ、フォロ・ロマーノでは人の量は少なく流れがないこと、トレヴィの泉では泉正面の道路と泉の東側の道路に、スペイン階段では広場の噴水周辺道路と階段正面のコンドッティ通りに大きな人の流れがあることがわかった。

5. 比較分析

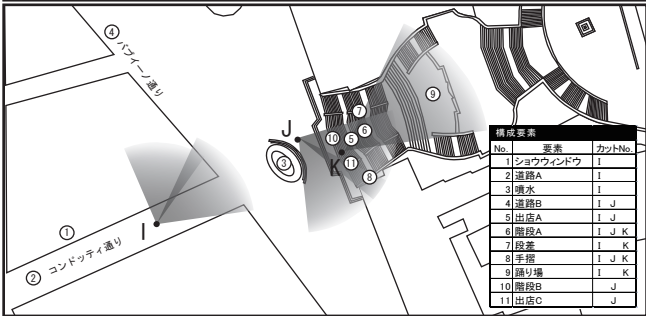
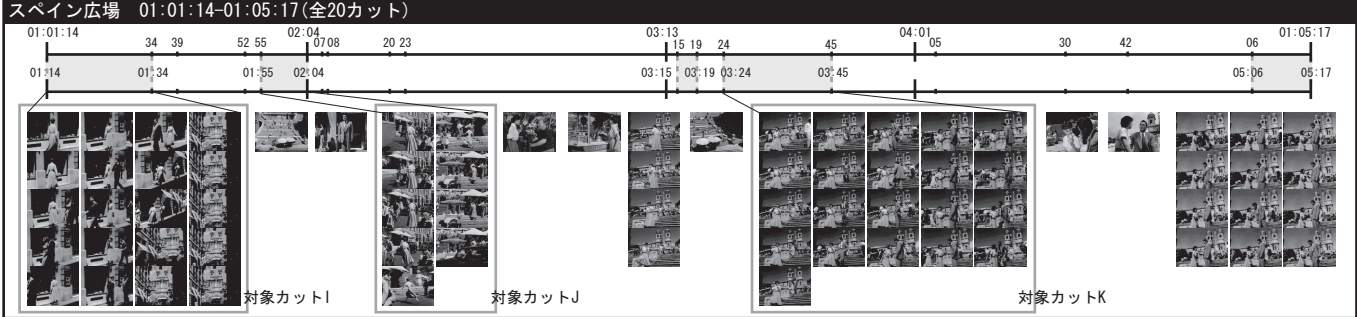
構図、構成要素、行為における映像と現地の相違点と構成要素と行為の関係性を考察し、比較分析した(表3)。

5-1. フォロ・ロマーノ 映像で見られる道路と歩道が現地になかったため、寝る行為や車が通ることは見受けられなかった。現地はフォロ・ロマーノ観光の出口で人が留まる場所になっているため映像とは大きな違いがあった。

5-2. トレヴィの泉 構成要素と人の流れにおける違いは少ないが、現地でのスクーターや自転車の量は減っていた。カットD、Eにおいてエッジの利いた建物前の空間は、映像、現地ともに人が頻繁に行き来をして人が留まる場所であった。カットFにおいて、教会前の階段は映像では人々の座って休む場所であるが、現地では泉の立ち見ギャラリーになっている。現地で人の流れ方に少し偏りがあったが、それはスペイン広場やナヴォーナ広場^{〔9〕}の影響であると考えられる^{〔10〕}。カットG、Hで見られる泉周辺の階段は、現在ギャラリーになっており座って泉を眺める人々で溢れていた。

5-3スペイン広場 カットIにおける大きな違いは、コンドッティ通りに並ぶ建物のファサードから出る凹凸と電線がなくなったことと、圧倒的に人の量が車の量より多くなったことである。カットJにおいて、広場中央にある噴水は二車線の境界線であり階段前は交通のための空間であった。しかし現地では階段から続く人々が自由に行き来して利用する広場の空間にになっており、現在では映像のように道路を渡るという行為は見られなくなった。人の流れはコンドッティ通りから広場を南北に通る道路を北に行き来する流れが大きく、北のポポロ広場^{〔11〕}から延びているバブ

▼表1 スコア表(スペイン広場の場合)



▲図2 アングルと構成要素(スペイン広場の場合) イーノ通りに見られた。またコンドッティ通りの人の流れはトレヴィの泉、ロトンダ広場^{〔12〕}、ナヴォーナ広場の影響によると考えられる^{〔13〕}。カットKにおいて、スペイン広場の階段で座って話をしたり、待ち合わせをする光景は現地でも見られた。スペイン階段は舞台のギャラリーのようであり、人々の交流の場、出会いの場であり、階段という上り下りするだけのエレメントでないことは同じであることがわかった。

6. 結論

映画「ローマの休日」の映像と現地の比較分析をした本研究からは以下のことを明らかにした。

- 1) 構図と構成要素：フォロ・ロマーノでは構成要素の変化が大きく該当しないが、トレヴィの泉とスペイン広場で見られる構図から現地の空間の距離やスケール感が読み取れ、現地と同様の視覚的体験ができた。つまり、映像における都市の認識は実空間の場合と変わりはないといえる。これらは建物等によるレイヤーの重なりと要素の数によると考えられる。
- 2) 構成要素と行為：スペイン広場、トレヴィの泉において階段や段差に座る、少し開けた空間に溜まる等構成要素の行為への誘発性は現地と変わらないことが多かった。従って、映像から読み取れる構成要素と行為の関係性は実空間においても生じる現象であるといえる。
- 3) 都市空間の人の流れ：スペイン広場とトレヴィの泉において人の流れは映像と変わらないことが多かった。しかし現地ではスペイン広場の噴水周辺の道路が溜まり場になり、新たな人の流れができていところも見受けられた。よって都市空間の人の流れは時を経て変化していき、映像から読み取ることができると一概にはいえない。

50年以上前を比較しても人の流れに違いはあったが構成要素と行為の関係性というのは変わることはなく、実空間を舞台とする映画から空間特性や構成要素と行為の関係性を読み取ることが可能であることがわかった。本研究では「ローマの休日」を対象としたが、今後更に実空間を映像化したものから読み取れることを明らかにすれば、この検証を実証へ近づけることができるのではないかと考えられる。

▼表2 行為表(スペイン広場カットIの場合)

人物	行為	要素No.	場所	場面	人物	行為	要素No.	場所	場面
(1)主人公A	ガラスを見て広場へ歩く	1-2	コンドッティ通り(左)	a-e	(4)車B	広場へ出て行く	2-3-4	T字路	m-q
(2)カップルA	ガラスを見て広場から歩く	2	コンドッティ通り(左)	e	(5)車C	階段へ出て行く	2-4	階段側道路	m
(3)車A	広場から向かって来る	2-3-4	コンドッティ通り(左)	m-q	(6)車D	広場から入ってくる	2-3-4	T字路	p-t

▼表3 映像と現地の比較・考察

映像と現地写真	構成要素	行為	考察
A	1	2	道路がなくなり車の行き来はなくなった。道路が静かになった空間が映し出れる。手前が石に変わり溝が見えなくなったため奥行きを感じられなくなった。
B	3	4	手摺がないため、寝る行為は見受けられない。車の通りもなくなった静かな空間になった。手前の階段門と奥の建物の距離感や建物の通り抜けは同じである。
C	5	6	道路がなくなり静かになったため奥の空間になった。
D	7	8	スクーターや車は少ない。
E	9	10	エッジが効いており泉が映れる開放感がある。出店がなくなったためこの空間での消費は見受けられなくなった。モニュメント前の開けた空間に人が溜まる行為は同じである。
F	11	12	出店の場所が移動した。
G	13	14	泉を眺める人が増えた。
H	15	16	教会の階段は休憩場所に。
I	17	18	スクーターや車での行き来は見受けられなくなった。奥の教会の階段に人が集まったり人が溜まる行為は同じである。
J	19	20	通りと段差のやり取りは変わらない。
K	21	22	泉周辺の段差に人々の交流がみられる行為は同じである。
L	23	24	泉を眺める人が増えた。
M	25	26	通りを歩く人の量が減った。
N	27	28	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
O	29	30	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
P	31	32	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
Q	33	34	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
R	35	36	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
S	37	38	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
T	39	40	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
U	41	42	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
V	43	44	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
W	45	46	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
X	47	48	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
Y	49	50	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。
Z	51	52	泉の湧き出しで奥に人々が通ることのできる空間に映し出れる。

脚注：1) 映像内で構図を構成する要素。2) 人の移動と動作(話す・食べる・座る・歩く・物の受け渡し等)。3) 「ローマの休日」/1953・アメリカ映画 ウィリアム・ワイラー監督 オーダーリー・ヘップバーンを躍らせたラブコメディの作品。4) 都市空間を背景にした奥行き感の感じられる構図。5) 対象に出来るカットがない共和国広場、ロトンダ広場は対象外とした。6) 対象としたカットのなかで同じ構図で行為の違いがないものは対象を1つにまとめた。フォロ・ロマーノでは対象と出来るカットとは4カットあったが2つのカットの構図がほぼ同じであるため対象を3カットとした。トレヴィの泉では対象カットは5カットあり、人の行為に多少違いが見られるが構図が同じものが2カットあるため比較分析の考察では4カットにした。7) 長尾重武：ルネサンス・バロックから近代までのイタリア建築史の第一人者。現在、武蔵野美術大学教授。8) コンドッティ通り：スペイン階段正面に延びる通り。9) ナヴォーナ広場：ローマ市内西川にある4つの大河という噴水が中心に建つ競技場型の広場。10) ヒアリング調査より。11) ポポロ広場：ローマ市内北東にあるかつてローマの玄関口といわれていた広場。12) ロトンダ広場：パンテオンのあるローマ市内のやや西にある広場。13) ヒアリング調査より。参考文献：1) 長尾重武「ローマイメージの中の『永遠の都』」1997/12/20 2) 吉村英夫「ローマの休日ーウィリアム・ヘップバーン」1994/10 3) 長尾重武「バロックの建築都市」1993/7/31 4) 野口昌夫「イタリア都市の諸相」 5) ケヴィン・リンチ「都市のイメージ 新装版」2007/5/29